

「らしい」言葉づかいとは ～役割語の実態と変化～

N H <社①ゼミ>

1. はじめに

テレビで昔のアニメやドラマを見た時、今と昔では、キャラクターのセリフの言葉遣いに変化があるのではないかと感じたことがあった。先行研究として、窪菌晴夫は「ことばに焼きついた話者の属性に関する情報は社会の中で共有されており、その社会の中で育った構成員であれば誰でもその知識を身につけている。小説やマンガなどは読者のこの知識を巧みに利用したもので」と記している。そしてそうした役割をもつ語や語尾を「役割語」と定義し、役割語は「らしく見せたい」場合にも使用されとする。

その前提に立てば、私が感じた言葉づかいの変化は、社会の変化を反映しているのではないかと考えた。そこで発行年代の異なる2つの作品を対象にして、似たようなキャラクター設定がされた登場人物の言葉づかいを比較することで、時代の変化に対応した役割語のあり方を研究する。

2. 仮説と調査方法

発行年代の異なる2つの小説を対象に、登場人物の言葉遣いを比較すれば、時代によって表現方法が異なり、それは時代背景の変化を反映しているのではないかと考える。

この仮説を立証するために、2つの小説を次のような条件で選定した。

- | |
|--|
| <p>ア その時代で誰もが認める典型的な純文学の作品</p> <p>イ 似たようなキャラクター設定がされた人物が出てくる作品</p> |
|--|

上の**ア**の条件を満たすため、年2回発表されている芥川賞作品の中から選ぶことにした。また上の**イ**の条件を満たすため、どちらも主人公が女子高校生の作品を探すことにした。その結果、次の2つの作品を対象とすることにした。

- | |
|---|
| <p>①宇佐見りん『推し、燃ゆ』2023年
…以下、作品①</p> <p>②高樹のぶ子『光抱く友よ』1987年
…以下、作品②</p> |
|---|

作品①は、アイドル上野真幸を解釈することに心血を注いでいる高校生のあかりが、学校も家族もバイトもうまくいかない毎日をなんとか生きている中、推しが炎上し、心の拠り所の喪失に直面する様を描いたものである。

また**作品②**は、大学教授を父親に持つ引ッ込み思案の優等生・相馬涼子と、アルコール中毒の母親をかかえ、少し大人びた雰囲気を持つ不良少女・松尾勝美の、17歳の2人の女子高校生の出会いと別れを通して、初めて人生の「闇」に触れた少女の揺れ動く心を描いたものである。

3. 調査結果

両作品に出てくる複数の登場人物を対象に、様々な状況での言葉づかいを調査した結果を**表1**に示す。

表 1 登場人物の言葉遣い比較

a. 親との会話の場面

	作品①	作品②
人物A 主人公 (女子高校生)	ねえなんで (リモコンを 取り上げられ て)	ほら父さんた ら、さっきとま た違うこと言 ってる
人物B 友人 (女子高校 生)		気分、悪い ん(気分悪い の?)

b. 同性の友人との会話の場面

	作品①	作品②
人物A 主人公	・そうな (そうなの?) ・でも、偉い よ、あかり は。来てて偉 い。(でもあ かりは来てて 偉よ)	・怖くない (怖くない?) ・あんた、どこ で聞いてた ん (あなた、どこ で聞いてい たの?)
人物B 友人	そうよ (そうだよ)	それはあるね

c. 大人との会話との会話の場面

	作品①	作品②
人物A 主人公	すみません、 あのすぐ片 付けますん で (アルバ イト先の客に 対して)	何でもないん です (友人の母親 に対して)
人物B 友人		いつか、本 当にいらして 下さいね(友 人の父親に 対して)

d. 先生との会話との会話の場面

	作品①	作品②
人物A 主人公	んん、なんと なく	やっといま刷 り終えたんで す
人物B 友人		すみません

4. 考察

二つの作品の相違点を分析する。作品①の特徴は、i) 助詞などの語の省略が多

い、ii) 主語と述語が倒置されていることが多い、iii) ら抜き言葉など、くだけた表現が多いなどがあげられる。一方、作品②の特徴は、i) 省略は少なく、時にクドく感じる、ii) 主語、述語の順の正しい文法で会話されている、iii) 友人同士でもかたい表現が多いなどがあげられる。これらより、新しい作品では会話はより短く、簡潔になっていることがわかる。

どちらの作品も女子高校生という同一の属性が話者であり、その言葉はごくふつうの女子高校生「らしく」感じられる一方、今の私たち高校生の会話に照らすと、作品①の方が自然に聞こえる。つまり高校生「らしい」言葉づかいは時代とともに変わってきているといえる。

5. おわりに

芥川賞作品での表現の比較から、時代の変化で役割語も変わっていくことが分かった。この背景には、snsの普及で簡潔な表現が日常的に使われるようになったことが大きいと考えた。表現が簡潔になったことで、相手への敬意や気づかいが失われ、調査した作品①の人物Aのようなぶっきらぼうな表現や、snsの文での誤解からのいじめに発展してしまうことが増えたと思われる。なりたい自分や伝えたい気持ちを、変化していく現代語の中で工夫して自分らしく使っていくことが私たち高校生に重要なことではないか。

参考文献

- [1] 窪菌晴夫 (2019) 「社会方言」『やわらかアカデミズム＜わかる＞シリーズ よくわかる言語学』146-147頁
- [2] 宇佐見りん (2023) 『推し、燃ゆ』河出文庫
- [3] 高樹のぶ子 (1987) 『光抱く友よ』新潮文庫

